

[2025/2026]九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻年報 : 2025/2026

<https://hdl.handle.net/2324/7441061>

出版情報 : 九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻年報. 2025/2026, pp.1-, 2026-03. Department of Library Science, Graduate School of Integrated Frontier Sciences, Kyushu University

バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution 4.0 International



Annual Report

Department of Library Science **2025/2026**
Graduate School of Integrated Frontier Sciences
Kyushu University

九州大学 大学院統合新領域学府
ライブラリーサイエンス専攻 年報 2025/2026

Annual Report

Department of Library Science **2025/2026**
Graduate School of Integrated Frontier Sciences
Kyushu University

Contents

専攻長挨拶	2
インターシップ体験記	3
国際シンポジウム開催報告	4
国際会議参加記	6
学際シンポジウム参加報告	8
受賞報告	9
新任教員紹介	10
イベント報告	11
研究データ管理(RDM)支援人材育成プログラム	12
専攻紹介	13
LSS活動日誌&教員一覧	14





専攻長挨拶

ライブラリーサイエンス専攻長として

ライブラリーサイエンス専攻長

石田 栄美

ライブラリーサイエンス専攻は、創立から15年を迎えました。私は立ち上げ当初から所属しておりますが、創設期から在籍している教員は、私を含めて3名となりました。退職された先生方の多大なご貢献の上に、新たな教員が加わり、専攻として次の姿を形づくっていく時期に差しかかっていると感じています。

とりわけ、本年度は、本専攻も参画する「人文情報連係学府」が新たに発足しました。同学府は、人文学と情報科学を融合する人文情報学（デジタルヒューマニティーズ）の深化を目的として設立されました。情報の管理と提供の新しいあり方を追究する本専攻にとって、デジタルヒューマニティーズは極めて密接な関係にあり、今回の参画は大きな挑戦であると同時に、新たな発展の契機でもあります。今後、人文情報連係学府とともに、本専攻がさらに成長し、研究教育の発展に寄与することを期待しています。

また、2023年度から始まった研究データ管理（RDM）支援人材育成プログラムは、今年度で第3期生を迎えることができました。全国の大学図書館員や研究推進部門の職員をはじめ、多様な背景を持つ履修者がいます。授業では議論の時間を多く設け、履修者同士の交流が深まるよう工夫していますが、今年度も活発な意見交換が行われています。大学における研究データ管理人材の育成ニーズが続く限り、本プログラムを継続していきたいと考えています。

生成AIが広く普及し、その有効性が認められる一方で、研究や教育への応用については信頼性や倫理の観点から慎重な検討が求められています。本専攻が扱う研究分野においても同様の懸念はありますが、新しい技術の導入を恐れることなく、多様な情報技術を積極的に取り入れ、情報の管理と提供に関する研究領域の発展に貢献したいと思っています。

東 泰恵 (ライブラリーサイエンス専攻 修士1年)

2025年8月、国立公文書館が主催する研修会に参加した。本研修は2週間にわたり、1週目には「アーカイブズ研修I」が開催され、2週目には本館およびつくば分館において「アーカイブズ実習」が実施された。いずれの講義・実習も極めて示唆に富んだ内容であり、参加できたことは大きな収穫となった。

「アーカイブズ研修I」では、国立公文書館をはじめとして、行政機関、大学等の多様な講師陣による講義を受講した。

その中でも特に印象に残ったのは、学習院大学の下重直樹先生による「日本における公文書管理とアーカイブズ」の講義である。ここでは行政機関における公文書管理改善の取り組みが多数紹介された。大蔵省における記録管理の事例は、データを収集・蓄積・保存する重要性を理解させるものであり、当時、先進的な職員が主導したことがきっかけとなったことが大変印象深かった。

また、アーカイブズの制度化において、戦後の史料保存運動が果たした役割についても学ぶことができた。1959年11月の日本学術会議勧告「公文書散逸防止について」が国立公文書館設置の契機となった経緯は、わが国のアーカイブズ形成史を理解する上で重要な意味を持つことを改めて確認できた。

そして、グループ討論では「デジタルアーカイブ」の班に参加した。様々な機関で業務に携わる実務者から、現場における課題や今後の展望について具体的な意見を聞くことができ大変有意義であった。とりわけ、資料のデジタル化に伴う人員確保の問題、利用促進に向けた施策の必要性、類縁機関との連携の重要性、ならびに目録作成や国際標準への準拠といった点が指摘された。これらを標準化すること

で相互運用性(横断検索等)を確保し、業務を効果的かつ効率的に進めることの重要性を改めて認識した。

続く「アーカイブズ実習」では、本館・つくば分館の施設見学に加え、評価選別、目録作成、保存修復に関連する基礎的作業など、アーカイブズ業務の根幹となる実務を体験した。

特に評価選別や目録作成に関する実習では、移管される簿冊のタイトル付与や件名の統一性が十分ではないため、移管後の整理作業に大きな負荷が生じている現状を実感した。これを踏まえると、文書を作成する行政機関における新規採用職員向け研修において、記録管理に関する基礎的な教育を実施し、作成段階から統一的な資料名やメタデータを付与する体制を整備することが重要であると考えられる。

本研修を通じて、「法律に基づいた理論と実務」「評価選別」「保存・環境管理」「システムの標準化」「展示」「デジタルアーカイブ」など、アーカイブズを構成する多角的な要素について理解を深めることができた。また、現在準備が進められている新たな国立公文書館に関する動向にも引き続き注目していきたい。今後は、文書記録管理に関する体系的知識をさらに深化させ、本研修で得た経験と知見を自身の研究および将来的な専門の実践へと活かしていく所存である。



symposium

国際シンポジウム開催報告

「研究データ管理支援に関する機関内・外のネットワーク構築」

2025年10月17日に、米国コーネル大学のWendy A. Kozlowski氏をお招きし、国際シンポジウム「研究データ管理支援に関する機関内・外のネットワーク構築」(同時通訳付)を開催しました。ライブラリーサイエンス専攻からも、富浦教授がパネリストとして、また石田教授がモデレータとして参加しました。対面とオンラインのハイブリッドで開催され、対面28名・オンライン123名の参加登録がありました。

<https://hdl.handle.net/2324/7405102>

日 時：2025年10月17日(金) 13:00～16:40

開催形態：ハイブリッド開催(同時通訳付)

会 場：対面(九州大学 伊都キャンパス 理系図書館(3F大会議室))・オンライン

主 催：九州大学データ駆動イノベーション推進本部(研究データ管理支援部門)

共 催：九州大学附属図書館

九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻

後 援：九州地区大学図書館協議会

九州・沖縄オープンユニバーシティ(KOOU) 研究データ管理・利活用ワーキンググループ

プログラム 13:00-13:15 開会挨拶

13:15-14:05 講演1「機関における研究データプログラムの構築：コーネル大学データサービスの事例」

Wendy. A. Kozlowski, Sarah Wright(コーネル大学図書館)

14:05-14:55 講演2「機関を超えた協働：The Data Curation Networkの紹介」

Wendy. A. Kozlowski(コーネル大学図書館)

15:05-16:30 パネルディスカッション

パネリスト：Wendy. A. Kozlowski、竹内比呂也(千葉大学副学長・附属図書館長)、

富浦洋一(九州大学データ駆動イノベーション推進本部研究データ管理支援部門長)、

西田洋輔(九州大学研究・産学官連携推進部研究企画課長)

モデレータ：石田栄美(九州大学データ駆動イノベーション推進本部研究データ管理支援部門 教授)

16:30-16:40 閉会挨拶





「研究データ管理支援に関する機関内・外のネットワーク構築」参加記

劉 立 (ライブラリーサイエンス専攻 修士1年)

今回のシンポジウムでは、コーネル大学のウェンディさんによる講演と、その後のパネルディスカッションに参加しました。講演は研究データ管理の具体的な方法より、「体制の形成」や「人と人との協力」の重要性に焦点が当てられており、とても印象に残りました。

まず、コーネル大学の研究データ管理サービスグループ(CDS)は、図書館だけでなく、IT部門、計算センター、社会科学センターなど、多くの部署が協力して成り立っていることを知りました。研究データ管理は一つの部署だけでは対応できず、専門分野の異なる人が協力してこそ、研究者を総合的に支援できるという考え方が強く伝わってきました。

講演の中では、部門をこえた定期的なミーティングで経験や課題を共有していること、サブジェクトライブラリアンの育成、研究者に気軽に相談してもらうための広報活動など、具体的な取り組みも紹介されました。また、データ管理計画の作成支援だけでなく、データ共有の形式、メタデータの作成など、細かい部分までサポートしている点もすばらしいと思いました。研究者との信頼関係を築きながら、データの再利用に整備する「データ・キュレーション」の考え方も、とても勉強になりました。

特に興味深かったのは、ウェンディさんがCDSのメンバーを「ボランティア」と呼んでいた点です。追加の報酬があるわけではなく、本来の仕事に加えて参加しているとのことでした。しかし、講演の質疑応答で分かったのは、CDSが始まった当初は「大学からのトップダウンの指示」もあり、半ば「voluntold(参加せよと言われたボランティア)」の状態で始まった人もいたという点です。つまり、完全に自発的な活動ではなく、トップダウンの後押しとボトムアップの協力が両方あって初めて組織が動き始めたということです。この話を聞いて、「良いスタート」「自発的な協力」と「信頼を基にしたネットワーク」の大切さを実感しました。

また、会議では人材の入れ替わりがある中で、情報や経験を共有し続けるための工夫も紹介されました。文書化、共有ドライブの整理、チケット管理システムの活用など、メンバーが変わっても知識が組織に残るようにしている点は、とても参考になりました。

パネルディスカッションでは、日本の大学で研究データ管理支援をどのように組織化すべきかという議論が行われました。日本では研究支援スタッフの役割が限定されており、アメリカのように大きなコミュニティを作ることは簡単ではありません。国ないし大学ごとに組織のあり方が異なる中で、海外や他大学の良い実践を学びたい一方で、自分の現状に合わせて工夫していくことが重要だと思いました。

全体を通して、研究データ管理を進めるためには、「完璧になるのを待つのではなく、とにかく最初の一步を踏み出すこと」が大事だというメッセージが心に残りました。それぞれの大学ができる範囲から始め、少しずつ協力しながら良い形を作っていくことが重要だと感じました。今回の会議は、今後の研究データ管理支援を考える上で、多くの示唆を与えてくれたと思います。

International conference

国際会議(ADMA2025)参加記

学会参加報告: ADMA2025

(The 21st International Conference on Advanced Data Mining and Applications)

久保 俊介 (ライブラリーサイエンス専攻 修士2年)

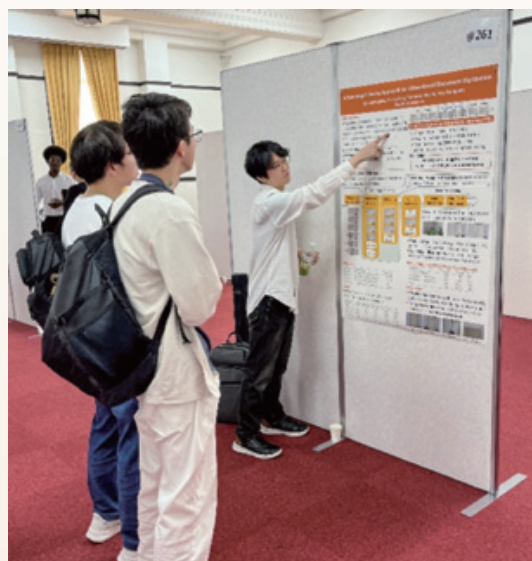
私は、2025年10月22日から24日にかけて、京都大学で開催されたADMA2025に参加し、口頭発表とポスター発表の両方を行った。以前に別の国際学会で口頭発表の経験があったことに加え、会場が国内の京都ということで移動での疲労がなかったため、気持ちの余裕をもって参加に臨むことができた。一方で、私にとって初めての英語でのポスター発表であり、英語での会話が満足に行えるのかという点で不安があった。

事前の想定とは裏腹に、口頭発表は少し苦い思いをすることになった。発表に問題はなかったが、続く質疑応答で言いたいことが英語で表現できないということがあった。具体的には、「一般に公開されている」という意味で「open to the public」という表現を使いたかったが、その瞬間にその表現が出てこなかった。

反対に、口頭発表セッションの直後のポスターセッションは素直に楽しむことができた。10名弱の参加者と議論を行うこ

とができ、有意義なフィードバックを得ることができた。ポスター発表では、ポスターの図を指し示すなどの非言語コミュニケーションによって、口頭発表と比較して求められる英語力のハードルは低いと感じた。英語であってもポスター発表は想定よりも気楽にこなせると気づいたのが今回の大きな収穫だった。

今回の参加を通して、私の課題として感じたのは英語力、中でも自分の言いたいことを即座に英語で表現する能力である。今後は英語での発信力をさらに高め、国際会議でより活発な議論に加え、雑談なども円滑に行えるよう努めていきたい。次回の機会では、英語への不安を払拭し、議論そのものを心から楽しめるよう準備をして臨みたい。



国際会議(IFDIK 2025)参加記



学会参加報告: IFDIK 2025

安田 さくら (ライブラリーサイエンス専攻 修士2年)

はじめに

2025年12月3日～5日にフィリピンの首都マニラにあるフィリピン大学BGCキャンパスで行われた、International Forum on Data, Information, and Knowledge for Sustainable and Ethical Societies (IFDIK 2025)に参加した。IFDIKは3つの国際会議で構成されており、そのうちの一つである、AP-iConferenceにShort Paperが採択され、15分間の発表を行った。

研究概要

本研究では、研究データの公開と共有に関する研究動向を明らかにするため包括的な文献レビューを実施した。2022年から2024年に公開された研究データの公開・共有に関する6,773件の論文を分析し、13のカテゴリに分類した。最も件数の多いカテゴリは「制度、ポリシー、ガバナンス」で、研究データに関する法的問題や法的枠組みがデータ共有に与える影響を論じた論文などが含まれる。次に多かったカテゴリは「データ共有の現状と影響」で、データを共有する際の課題や、研究者がデータを共有する動機についての論文などが含まれる。医療分野では「プライバシー保護」と「患者・被験者が自身のデータ共有を許可する要因」に焦点を当てた研究が多数見られた。一方、「データ再利用」や「データの質」に関する研究は比較的少ない。本レビューにより、現行の研究が、研究データの共有に必要なインフラや、データ公開前の現状・課題の分析に重点を置いていることが明らかになった。一方で、データの質の評価や再利用の現状など、公開後の研究データについての諸問題を扱う研究は未だ限られていることが判明した。

発表について

指導教員の石田先生、渡邊先生にご指導いただき、スライドと発表原稿をしっかりと準備して臨めたため、当日の発表は落ち着いて行うことができた。IFDIKの全日程を通して、会場となったフィリピン大学で図書館情報学を学ぶ学生が多く参加しており、私の発表の聴講者もほとんどフィリピン大学の学生だった。20名ほどであったが、中には熱心に聞いてくれる人もおり、準備をした甲斐があったと感じた。

質問は4件あり、全てMethodについての質問だった。「レビュー対象となる論文を2022-2024年に限定した理由は何か」「カテゴリはどうやって作成したのか。先行研究を応用したり、既存の理

論を用いたりしたか」といったシンプルな質問だったため、英語で回答することができて安心した。

フィリピンについて

会場があるBGCというエリアは、高層ビルや商業施設が立ち並ぶ、マニラの中でもかなり近代的な場所で、夜に歩くだけでも十分楽しむことができた。フィリピン料理は、会場で提供されるケーキタリングや、BGC内のフィリピン料理屋で味わうことができたが、辛すぎず甘すぎず日本と似た味付けのように感じた。また、スーパーでレジの使い方について聞くと親切に教えてくれたり、初日に行われたReceptionではフィリピン大学の学生たちが急にカラオケで歌い始めたりと、明るく親切的なフィリピンの国民性を感じた。

終わりに

準備は大変だったが、発表も質問対応も落ち着いて行うことができ、良い経験となった。大学院進学を決めた理由の一つに、国際会議で英語で発表する経験を積みたい、という気持ちがあったため、在学中に達成できて安心している。フィリピンは治安が不安定なところがあるものの、英語が聞き取りやすく、人も親切だったため、初めて発表を行うには良い場所だったと感じた。

最後になりましたが、指導教員の石田先生、渡邊先生、共著者の劉さん、準備にあたってご助言いただいたゼミの皆様にお礼を申し上げます。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございます。



学際シンポジウム参加報告

じんもんこん(人文科学とコンピュータ研究会シンポジウム)

日 時：2025年12月13日(土)～14日(日)

会 場：九州大学 伊都キャンパス 椎木講堂

開催趣旨：社会をつなぎ直す情報技術 <https://www.jinmoncom.jp/sympo2025/>

主 催：情報処理学会 (IPSJ)、人文科学とコンピュータ研究会 (SIG-CH)

共 催：九州大学 人文情報連携学府、九州大学大学院 人文科学研究院、九州大学 人社系協働研究・教育コモンズ
九州大学大学院 統合新領域学府 ライブラリーサイエンス専攻、九州大学大学文書館、九州大学附属図書館

ライブラリーサイエンス専攻も共催に入っているじんもんこんの参加報告を、スタッフとして参加した人文情報連携学府の学生に執筆していただきました。

劉 テイ (人文情報連携学府 修士1年)

2025年12月13日から14日にかけて開催された人文科学とコンピュータシンポジウムに参加しました。今回は自分の専門分野に近いシンポジウムであり、高い関心を持って参加することができました。会期中はマイク係を担当し、先輩方や先生方から多くの助言や親切なサポートを受けました。運営に携わることで、学会が円滑に進行するための裏側を知る貴重な経験となりました。

シンポジウムでは口頭発表とポスター発表の双方が行われ、多様な研究発表を拝聴しました。ポスター発表の時間には、発表者と直接意見交換を行い、研究の背景や手法について詳しく話を聞くことができました。分野や立場の異なる研究者と交流することで、新たな視点を得ることができ、大変有意義でした。特に、源氏物語を対象とした語彙や登場人物の計量的統計分析や、くずし字認識アプリの開発に関する発表が印象に残りました。文学研究においても様々な統計手法が活用されていることを知り、自身の研究への応用可能性について考える契機となりました。

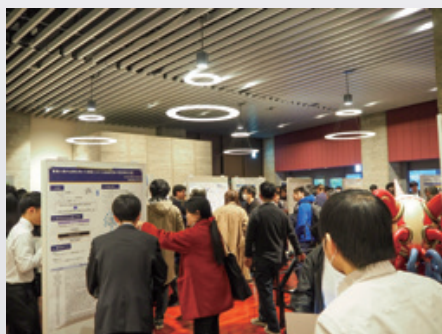
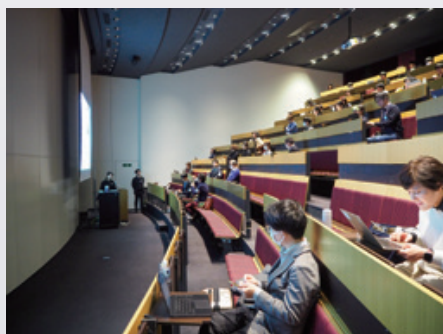
陶山 理香子 (人文情報連携学府 修士1年)

2025年度12月13、14日に九州大学で行われたじんもんこんに、私は発表者としてではなく会場設営の手伝いとして参加しました。当日はポスター発表会場の設営やマイク係などを担当しましたが、それ以上に貴重な学びを得ることもありました。

まずひとつは、学会発表の多様さです。私は今まで国文学分野の発表を聞く機会が多かったのですが、比較して研究の幅が広いように感じました。例えば、バレエの身体動作を3Dモデル化するという研究などです。テキストデータの構築などの研究が殆どだと以前は考えていたので、このような研究がされていること、そしてじんもんこんで発表されていることは興味深く感じました。

また、ポスター発表に関しても刺激を受けました。すべてのポスター発表をしっかりと聞いていないので、私の所感ですが、テキストデータ構築の研究などが目立つという印象でした。このデータ構築の研究も現在取り組んでいる研究にも役立ちそうなテーマが多くさらなる発展を望めるのではないかと考えました。

このように、興味深い発表を聞く貴重な体験をしました。これらの研究発表を聞いた経験を踏まえて、私自身も人文情報連携学府が掲げるような発展性のある研究にさせられるように努力したいです。



伊波普猷賞を受けて

本土 博成 (ライブラリーサイエンス専攻 准教授)

本専攻でアーカイブズ学関係の教育を担いつつ、自身の研究成果として2023年12月に『近世日琉関係の形成—附庸と異国のはざまで』(名古屋大学出版会)という専門書を刊行し、第52回(2024年度)伊波普猷賞を頂戴しました。これは沖縄タイムス社が主催する賞で、沖縄学の父・伊波普猷(1876~1947)の業績を顕彰し、伊波に続く沖縄の文化振興と学術の発展に寄与する研究や著書に贈られるものです。

さて、本専攻では情報の受け手(ユーザー)の視点を大切にすることが謳われています。人間社会では、送り手と受け手のどちらの視点に立つかで、見えてくる像がまったく異なるということが多々あります。身につまされたのが、この本の「幕薩琉関係における泡盛」という章を書いている時でした。

本章では沖縄の特産品として名高い泡盛(タイ米を原料とする蒸留酒)が、1609年以降は琉球を統治した島津氏から、徳川将軍に対し献上された事実注目しました。将軍の代理の幕府老中から島津氏に対して出された御礼状を並べると、17世紀当初は受領した酒は「焼酎」「琉球酒」「泡盛」と年によって表記にブレがありましたが、17世紀中頃からは徐々に「泡盛」に収斂することが分かりました。

なぜ、こうした変化が生じたのでしょうか? 泡盛を献上した島津氏側(送り手)の事情も考慮してみたのですが、なかなか上手く説明できませんでした。そこで、仮説を立てました。琉球から泡盛を入手した島津氏側は、一貫して「泡盛」という固有の名称で将軍に献上していたものの、礼状を書く老中の右筆(受け手)が、みずからの解釈で礼状を書いたがゆえに、残された史料にブレがあるのではないかと。つまり、薩摩・琉球の事情に通じた右筆は「泡盛」、蒸留酒に疎い右筆は一般名称としての「焼酎」、生産地にこだわる右筆は「琉球酒」、といった右筆の個性を想定したのです。

こうした見通しの当否は、今後のより大規模なデータマイニングによる検証に委ねたいのですが、「ユーザーの視点」ということを私なりに重視した仮説といえます。この間、いろいろと相談にのっていただいた教職員各位や、結論のない授業にお付き合いいただいた院生の皆さんに、ただただ感謝しております。



受賞作



贈呈式の様子(2025.2.12 前列真ん中が筆者)

message

新任教員紹介



上山 あゆみ (ライブラリーサイエンス専攻 教授)

私は2002年4月に人文科学研究院に着任し、2025年度からライブラリーサイエンス専攻を担当しています。専門は理論言語学です。

理論言語学とは、私たちが日々、言語を操ることができるのは頭の中にどのような仕組みがあるからなのか、仮説を立てつつ検証をしていく学問です。言語のどのような側面に注目するかは研究者によって異なりますが、私が特に興味を持っているのは、個々の単語が組み合わせられることによって、どのように文の意味が形成されていくか、その過程を明らかにすることです。そのためには、個々の単語が単独ではどのような意味を持ち、それがどのように組み合わせられることによって意味がどの

ように変わるか(もしくは、変わらないか)を調べる必要があります。

そのような文脈で、現在私が最も注力しているのが、日本語の基本的な動詞の意味を1つ1つ調べて記述していくプロジェクトです。これは、理論的な目的があるだけでなく、日本語を外国語として学ぶ方々に役立ててほしいという思いもあります。

このサイトは、基本的には日本語学習者用のもので、たとえば「教室からあふれる」「町中にあふれる」などの格助詞の使い分けを日英対照の例文を通じて学ぶことができます。母語話者が言語を使う際、それがどのような知識に基づくのか、理論的な裏付けを持ちつつ、表面的には理論の概念を出さずに、学習者が英語に対して持っている「無意識の知識」を最大限に生かして、日本語を体得できるよう工夫されているものです。

日本語の動詞の用法については、これまでもいろいろな本が出版されていますが、どれも日本語による説明にとどまっています。このサイトの例文は、日本語・英語の両方に通じた研究者がチームで相当な時間をかけ、何度も改訂を重ねたものです。この動詞辞書作成のプロジェクトを引き続き進行中で、部分的な成果が公表されている段階ですが、日本語学習者のみならず、英語学習者・AI研究者・言語学者が様々な利用できる側面があると考えています。興味のあるかたは、ぜひご覧ください。

ユーザー登録 ログイン

日本語 ▾

Don動詞どん

日本語語彙の記述を目指して

私たちは日本語の語彙（レキシコン）に興味を持っており、現在、日本語の動詞のデータベースを作成しています。これは、言語学者、日本語教師、日本語学習者、AIエンジニア、他の言語を学んでいる日本語話者など、多くの方々にとって有用なものになると考えています。私たちの目標は、日本語に強く興味を持っている方々のコミュニティを作ることです。このページでは、私たちがこれまでに行ってきたことをご紹介します。これにより、皆さんが私たちのコミュニティの一員となってご協力いただけることを願っています。以下にご紹介するように、皆さんにご協力いただけることはいくつもあります。ぜひご参加ください。

現在進行中のプロジェクト

日本語の動詞データベース（基本動詞）

このプロジェクトには20人以上の研究者が参加しており、以下のようない項目（エントリー）で構成される日本語の基本動詞のデータベ

↑webページ
(<https://www.dondoushidon.org/>)

イベント報告

シンポジウム「接続する人文学」を開催しました。

アートを記憶する——アジアにおける芸術資料とアーカイブの可能性

国際関係論がご専門の岸清香先生と、戦後日本美術史がご専門の黒田雷児先生にご登壇いただき、また、東南アジアの近代美術がご専門の栗原ふみ先生にも話題提供をいただき、アジアの国際関係の観点からアジアの美術史を議論しました。

開催日時：2025年4月7日（月）14:00～17:10 開催場所：九州大学伊都キャンパス イースト1号館 E-A-239会議室

司会／武夢茹（九州大学 大学院人文科学研究院）

14:00～ 趣旨説明

14:20～ 登壇者1：岸清香（都留文科大学 教養学部）「アジア国際関係の変容と美術資料・アーカイブの編成」

15:20～ 登壇者2：黒田雷児（福岡アジア美術館）「創造としての歴史～破片から物語へ 『アジア美術資料室』ウェブサイトを使ってみる」

16:20～ 総合討論

パネリスト1 栗原ふみ（福岡アジア美術館）「自生するアジア美術アーカイブの現状と課題——ベトナム、タイの事例を中心に」

パネリスト2 武夢茹（九州大学 大学院人文科学研究院）

共催：九州大学大学院人文科学研究院／九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻／
九州大学人社系協働研究・教育コモンズ

<https://dh.kyushu-u.ac.jp/post-1184/>

科学史から見た生成AIとDH

仏教学・人文情報学がご専門の下田正弘先生と、計算機の科学史がご専門の杉本舞先生に登壇いただき、計算機、特にAIの歴史の観点から人文情報学を議論しました。

開催日時：2025年9月8日（月）14:00～17:00 開催場所：九州大学附属図書館（中央図書館）講習会スペース

司会／水谷亮介（九州大学 大学院人文科学研究院）

14:00～ 登壇者1：下田正弘（武蔵野大学）「人文学とデジタルヒューマニティーズ」

15:00～ 登壇者2：杉本舞（関西大学）「AIの歴史的展開と生成AI」

16:00～ 総合討論

パネリスト1 池田大輔（九州大学 大学院システム情報科学研究院）

パネリスト2 飯嶋裕治（九州大学 大学院基幹教育院）

17:00～ 入試説明会

共催：九州大学大学院人文科学研究院／九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻／
九州大学人社系協働研究・教育コモンズ

<https://dh.kyushu-u.ac.jp/post-1452/>



研究データ管理(RDM)支援人材育成プログラム

(1)本プログラムの現況

2023年10月から開始された本プログラムですが、第1期、第2期の履修生を無事に送りだし、現在は、第3期生が学んでいるところです。第1期は13名の科目等履修生と4名の九州大学院生で始まりましたが、日本の研究機関における研究データ管理・支援の必要性が認識され始めたことや、研究成果に対する即時OA義務化の方針が示されたことなどの影響を受け、本プログラムの履修を希望する学生も増えてきました。第2期(2024年10月～)は、23名の科目等履修生と1名の院生が履修しました。第3期(2025年10月～)は、27名の科目等履修生と3名の院生が履修中です。

本プログラムの運営に関して、外部資金の援助を受けられたこともあり、海外で研究データに関する支援を行っている実務家をお招きし、それぞれの大学におけるサービスの紹介や、内容は毎年異なりますが、データキュレーションやリポジトリへのデータ登録、DMPのコンサルテーションに関するワークショップを授業の一環として行いました。ワークショップは短い時間でしたが、履修者の皆さんも実際に手を動かすことで、データキュレーションを使ったデータ公開などを、どのようにやるのかという具体的なイメージができたようです。また、海外の実務家との質疑応答やワークショップのやり方などをみて、大いに刺激を受けた履修者もいたようです。

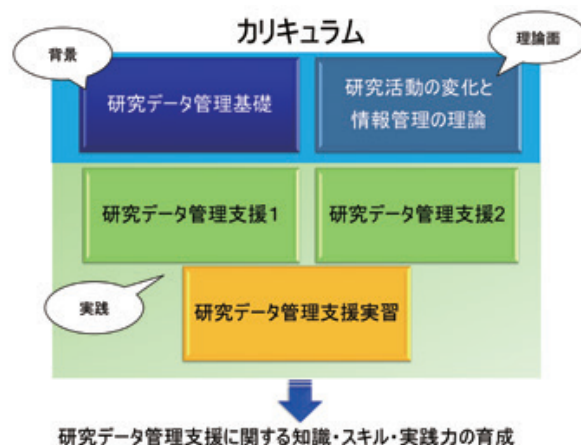
オープンアクセスや研究データ管理支援に関する動向などは変化が激しいですが、今後も、できるだけ、ニーズに即したプログラムを提供していきたいと考えています。

(2)カリキュラム

カリキュラムは、5科目5単位(1科目、15時間)で構成されており、全て必修です。各科目の関係性は以下の図、科目の詳細については「科目一覧」(ライブラリーサイエンス専攻HPより確認可能)をご覧ください。

「研究データ管理基礎」は、後期(10月中旬頃)の土日を使って、九州大学伊都キャンパスにて対面授業で実施します。「研究活動の変化の情報管理の理論」は後期の土曜日にオンラインのライブ授業で実施します。その他の3科目については、次年度前期の土曜日に開講予定です。社会人の方々が受講しやすいようにできるだけ配慮いたします。

各年度の授業スケジュールの詳細については、「科目一覧」をご確認ください。



(3)履修証明プログラムの概要

「研究データ管理支援人材育成プログラム」では、社会人を統合新領域学府の科目等履修生として受け入れ、履修により合格した科目については統合新領域学府により単位を認定します。本プログラムでは、75時間以上の課程の修了者(5科目5単位以上の修得)に対して履修証明書を交付します。

九州大学の大学院生が本プログラムの科目を履修した上で、統合新領域学府により合格科目の単位認定を受け、「修了要件」に記載の要件を満たした場合も、履修証明書を交付します。

(4)その他

プログラムの概要、科目や募集要項などの詳細は、ライブラリーサイエンス専攻HPをご覧ください。

ライブラリーサイエンス専攻HP ▶ <https://www.ifs.kyushu-u.ac.jp/lss/>

専攻紹介

ライブラリーサイエンス専攻では、新しい枠組みにもとづき、
知の創造に関わる課題を知の統合によって解決し、
ユーザーの視点に立った情報の管理・提供を担う人材を養成します。

学 府 名：大学院統合新領域学府 Graduate School of Integrated Frontier Sciences

専 攻 名：ライブラリーサイエンス専攻 Department of Library Science

学 位 名：修士（ライブラリーサイエンス）：Master of Library Science

修士（学術）：Master of Philosophy

博士（ライブラリーサイエンス）：Doctor of Library Science

博士（学術）：Doctor of Philosophy

入学定員：修士課程 8名

博士後期課程 3名

開設時期：修士課程 平成23（2011）年4月

博士後期課程 平成25（2013）年4月

教育研究上の理念／入学から修了まで

【理念】ユーザーにとって真に意義ある情報の管理・提供の実現



情報の管理・提供に興味
を持つ、修士課程修了者



情報の管理・提供
に携わる社会人



情報の管理・提供に興味
を持つ、学部卒業生

【博士課程】2013年4月開設、入学定員3名

情報の管理・提供に関する課題を解決し、ライブラリーサイエンスを深化・発展させる人材（研究者）の養成

- ① 図書館情報学、アーカイブズ学、情報科学をカバーするT字型の研究能力の養成
- ② ユーザーの視点に立って、意義ある情報の管理・提供を考察する能力を養成
- ③ 従来の枠組みにとらわれずに、情報の管理・提供に関するより良い枠組みを探究する能力を養成

【修士課程】2011年4月開設、入学定員8名

情報の管理・提供の場で実践的に活躍する人材の養成

- ① ユーザーのニーズと知の創造・継承プロセスを把握させる教育
- ② 図書館情報学とアーカイブズ学を統合した一体化教育
- ③ 情報の管理・提供を実現する情報通信技術の教育
- ④ 情報法制と情報流通制度に関する教育
- ⑤ 情報の管理・提供の在り方、ライブラリーの新たな機能を探究する能力の養成

大学等の教育・研究機関
ライブラリーサイエンスを
深化・発展させ、人材養成
を行う大学等の教員

情報の管理・提供組織
情報の管理・提供の新た
なモデルを提案し、組織を
牽引するリーダー

公文書館

記録管理の専門企業

図書館

情報サービス関連企業

情報通信技術関連企業

研究機関

ライブラリーサイエンス専攻活動日誌 2025年度

2025年5月21日(水)

入試説明会 ハイブリッド開催

2025年8月20日(水)

入試説明会 ハイブリッド開催

2025年10月7日(火)

修士論文中間発表会

九州大学伊都キャンパス イースト1号館B-427号室

2025年11月10日(月)

入試説明会 ハイブリッド開催

2026年2月27日(金)

修士論文公聴会・着手発表会

九州大学伊都キャンパス イースト1号館B-427号室

教員一覧

冨浦 洋一	システム情報科学研究院	赤司 友徳	大学文書館
藤岡 健太郎	大学文書館	清水 敏之	附属図書館
石田 栄美	データ駆動イノベーション推進本部	木土 博成	比較社会文化研究院
上山 あゆみ	人文科学研究院	谷口 雄太	情報基盤研究開発センター
渡邊 由紀子	附属図書館	中川 奈津子	人文科学研究院
大賀 哲	法学研究院	内林 俊洋	情報基盤研究開発センター

修士論文題目一覧

- ▶ 久保 俊介 動画を活用した効率的な文書デジタル化手法の開発
- 林田 慎太郎 生成AIを用いた論文からの糖類の相対反応性情報の抽出
- 劉 子衿 研究データ発見性向上に向けた生成AIによるキーワード推薦とその評価
- 徐 雨戈 台北帝国大学関係文書の研究
- 山仲 一颯 解答コードの確率的表現に基づく類似性観点可変なプログラミング問題検索
- 黒川 怜雄 データセット推薦RAGのための関連論文ランキング手法

問い合わせ先

九州大学大学院 統合新領域学府

〒819-0395 福岡市西区元岡744番地

ライブラリーサイエンス専攻

工学部等教務課統合新領域係 TEL(092)802-6501

※詳しくは、統合新領域学府のホームページをご参照ください。

<https://www.ifs.kyushu-u.ac.jp> <https://www.ifs.kyushu-u.ac.jp/lss/>

令和8年(2026)年3月発行

編集発行 九州大学大学院統合新領域学府 ライブラリーサイエンス専攻
〒819-0395 福岡市西区元岡744番地
工学部等教務課統合新領域係(イースト事務室)
TEL:092-802-6501

印刷 城島印刷株式会社